

「心のバリアフリー」 4月号 ～「こころの扉」を少し開いてみませんか～

車を運転していると身体障害者マークや高齢運転者マークなどのステッカーを貼った車を見かけることがあります。そんな車に出会うと車間距離をとったり、スピードを緩めたりします。ステッカーを貼って周囲に配慮を必要としていることを知らせることで、こちらでも安全・安心な運転をしようと気をつけることができます。

現在、どんな人でも使いやすいようにトイレや歩道などにバリアフリー化が広がっています。しかし設備が整っても、バリアを抱える人に対する無関心や誤解、何気ない言動でバリアを作ってしまうことがあります。

社会には障がい者や高齢者だけでなく、身体の内部に疾患のある人や妊娠初期の人など、外見

では配慮が必要であることが分かりにくい人もいます。このような人にとっても生活を送る上でバリアが存在するのです。

「火曜日の朝7時58分。名古屋市在住のMさん（75）は、毎週この時間を楽しみにしている。不自由な目の治療に向かう地下鉄の乗り換えで、きまって車内へ案内してくれる人がいるからだ」。これは数年前、ハッピーニュースに選ばれた記事の一部です。会社勤めのYさんは駅のホームで人並みにさらわれそうになるMさんを見て以来、毎週駅のホームでMさんを待ち、車内へ案内するようになったそうです。Yさんの行動は、バリアを抱える人を目を向けるきっかけを教えてくださいました。

困っている人に気付くこと、声をかけることから心のバリアフリーが始まります。中には、困っていそうだけど

何に困っているのかわからないという場合もあります。そんな時「何かお困りでしょうか」「私にできることはありますか」と聞いてみましょう。一人ひとりが、心のバリアフリーを実践することで、バリアのない社会が広がっていくのだと思います。

